

「それじゃあ本物のマゾ女を披露しようじゃないか。俺が調教した真性マゾの女だぜ」

相沢真也の言葉にボックス席の三人は顔を見合わせた。

真也はすでに携帯を取り出していた。このスナックに呼び出すつもりなのか。携帯での連絡は簡単なやり取りで、それは命令口調だった。

真也が連絡した30分ほど後、スナックのドアが開いた。目を向けると、ベージュのスーツに淡い色調のフレアスカートが入ってきた。真也が紹介するマゾ女だろうか。膝丈のスカートから伸びる脚がすらりと長い。ボックス席に座る真也の姿を認めると、その女性は、姿勢よく背筋を伸ばし、滑るようななめらかな歩き方で近寄り、脇に立った。ママが席を譲ろうと腰を上げかけたとき、

「遅いじゃねえか！」

席から立ちあがった真也は、いきなり手を伸ばした。女の頬を平手打ちしたのだ。びしっと乾いた音が響き、ボックス席の徹はビンタされた女を見つめた。立ったままの女は

頬を手で押さえ

「ごめんなさい」

とようやく聴きとれる声を出した。目鼻立ちの整った美しい顔の女だった。

「お前はそこに立っていればいいんだよ」

奴隷は立たせておけばいいのさと席を譲ろうとしたママを押しとどめる。

「年増だがいい女だろ。」

徹は立たされたままの女性をあらためてまじまじと見た。

「自己紹介しな！」

「は、はい…川本結衣と申します」

柔らかそうな胸の隆起が衣服の上からも目立つ。ウエストのくびれは女性特有の滑らかな曲線を描いて魅力的だ。肩にかかる髪は艶やかな栗毛色でゆるやかにウェーブがかかっていた。

「お前は俺のなんだ？はっきりと言ってみろよ」

「…奴隷です」

立たされた女性は辛い表情をボックス席の皆に見せた。目鼻立ちの整った美しい顔に羞恥の色がさっとにじむ。

「牝奴隷だよな」

「はい、私は牝奴隷です……」

声がかすれている。首筋まで羞恥の色に染まっていた。胸元から覗いているくぼんだ鎖骨が色っぽい。

「いじめられるのが好きな牝奴隷だろ！」

真也の声は大きい。

「はい、私はいじめられるのが好きな牝奴隷です」

美しい年増女はさらに羞恥にさいなまれている表情を見せる。

「ふふふ、この女、真性マゾだぜ。こうして言葉で煽ってやるだけで、濡らしてしまうのさ」

真也はしたり顔だ。

「お前、本当に女を奴隷にしているんだな」

徹は、恥らって顔をうつむかせている結衣から目を離せなかった。

「結衣、後ろを向いて臀を突き出しな」

「相沢君、酔っているわよ。お連れの女性、かわいそうじゃないの」

スナックのママは羞恥の色をありありと見せている女性に気の毒そうな視線を送っている。

「ママ、いいんだ。こいつはね、恥ずかしいことを強要されるのが好きでね。露出プレイにも興奮するんだぜ。な、結衣、そうだろ？」

「ここでは許してください…お願い、私家で…子どもたちの前でもあなたに尽くしますから…」

「子どもたちには生き恥をさらせても、ここではいやだっ  
て言うのかい？俺の命令に逆らうんだな。それじゃあ、こ  
こで素っ裸にしてやろうじゃないか。そのほうが結衣には  
うれしい露出プレイになるよな」

すっかり酔っている真也の顔に残酷な笑みが宿った。

「お尻をさらします。ですから裸にはさせないで。お願い  
…」

結衣はくるっと後ろを向き、臀部をボックス席にさらした。スカート越しに真也がその臀部をなでる。量感的なむっちりとした双臀がフレアスカート越しに真也に愛撫され、反応してしなやかにゆれる。

「むっちりとしたいい尻だろ？鞭の味を十分に知っている感度のいい牝の尻さ」

真也は撫でていた手で、いきなり尻肉をスカート越しに叩いた。続けて二度、三度と叩く。ビシッ、ビシッと乾いた音が店内に響き、フレアスカートの裾がひらひらと蝶の羽ばたきのように揺れた。揺れるスカート越しに結衣の丸みを見せる双臀が踊った。

「許して…恥ずかしい…」

初対面の者たちの前で spanking され、恥らう結衣のハスキーな声が艶かしい。

「恥ずかしいのはこれからだぜ。ママ、この女はね、卵が好物さ」

真也は4個の鶏卵を要求した。ボックス席のテーブルに鶏

卵を運んだのは芳江という若い女性従業員で真也の言いつけどおりに小皿に盛ったマヨネーズも同時に持ち込まれた。真也は運ばれた鶏卵の白い殻にマヨネーズをまぶしていく。

「ああー……つらい……」

臀部を向けたままの姿勢で結衣は哀しい声を洩らした。美しい顔は栗毛色のつややかな髪に隠れているが、羞恥にひっそりと悶えるさまは伝わってくる。

「結衣の好きな卵を食べさせてやるぜ。生臀を披露しな！」

ビシッと真也が臀部を平手打ちすると

「どうぞ見てください」

と結衣はつぶらな瞳をそっと閉じて、乱れた髪をかき上げた。つぎにフレアスカートをゆっくりとたくし上げていく。店内の照明に照らし出された下半身は眩いほどの白さだ。

「おい、ノーパンなんだな」

思わずつぶやいた徹は、身を乗り出す。パンティをはいていない双臀がむき出しになったのだ。むっちりとした量感

のある官能的な光景だ。女の尻肉は店内の照明に照らされ、まばゆいばかりに白い肌だ。

「わたし、下着の着用を禁止されています・・・」